

陰謀論と妄想

コロナ禍における陰謀論の流布についての 精神病理学的分析の試み

深尾 憲二郎

帝塚山学院大学 総合心理学部 総合心理学科

Abstract: We attempted to analyze the dissemination of conspiracy theories that have become apparent during the coronavirus pandemic from a psychopathological perspective. As conspiracy theories have infallibility and unfalsifiability in common with psychotic delusions, and people who are “awakened” by incorporating conspiracy theories are similar in behavior to psychotic patients with active delusions, it cannot be said that conspiracy theories are social pathologies and have nothing to do with individual psychopathology. The dissemination of conspiracy theories during the coronavirus pandemic was thought to be due to the fact that the absurd social repression under the implementation of national infection control measures has created conditions that make it easier for people with delusional predispositions to come into contact with conspiracy theories and embrace them. In addition, the proliferation of conspiracy theories suggests the possibility of worldview fragmentation due to mental illness.

キーワード：陰謀論、コロナ禍、妄想、精神病、精神病理学

1. パンデミック下の陰謀論の蔓延

2020年初頭から3年余りにわたったコロナ禍において、次のような陰謀論が世間に流布した。「新型コロナウイルス感染症というものは実在しない。あるいは実在したとしても大したものではない。実は各国政府やWHOがこれを非常に危険な感染症だと世界の人々に信じさせて恐れさせることによって、その裏で別の目的をもった秘密の計画が進行しているのだ。その計画とは、危険なワクチンを強制的に接種させることによって世界の人口を一気に減少させることである。」

この計画の主体として「ディープステート（闇の政府）」という超権力が想定され、米国民党政権やビル・ゲイツなどの資産家とそのメンバーないし協力者だとされている。この陰謀論では、今回初めて開発・導入されたメッセンジャーRNAワクチンは、接種されると数年以内に死に至らしめる非常に危険なものだとされている。しかしながら、現実にはコロナワクチン接種が原因で死亡したという人は、皆無ではないにせよ、ほとんどいない。

大多数の人にとっては馬鹿げた話なのだが、それでも少なからぬ人がこれに類する陰謀論を信じ込み、マスク着用・ワクチン接種などの政府の方針に反した行動をとった。それだけであれば個人の自由なのだが、現実にはこの種の陰謀論に囚われた人が、家族・親類や友人・同僚にその陰謀論を熱心に説き、そのために家庭内や職場内での人間関係が壊れてしまうという深刻なケースがそこら中で起こっていた¹⁾。

陰謀論に囚われた人たちの様子は、周囲の人からは「人柄がまったく変わってしまった」「何かに取り憑かれたようだ」と感じられていた。つまり、まるで妄想を発症した精神病患者のように見えるのだが、それでも彼らが精神病患者ではないとすれば、どこが違うのだろうか？

2. 陰謀論とは何か

陰謀論はいつの時代にも存在する²⁾。いくつか例を挙げれば、米国建国当時から現在まで続くフリーメイソン陰謀論、第二次大戦前に喧伝されたユダヤ陰謀論、同大戦終了直後から流布したパールハーバー陰謀論、ケネディ大統領暗殺事件に関する陰謀論、アポロ宇宙船の月面着陸が捏造であったという陰謀論、エイズが人工感染症であるという陰謀論、9・11同時多発テロは米国政府の自作自演であったという陰謀論、あるいはUFOと宇宙人を米国政府が隠しているという陰謀論などなどである。陰謀論は歴史そのものと同じくらい古いのだが、学術的な研究の対象とされるようになったのは2000年前後からのことである³⁾。

学術的な研究対象には定義が必要だが、Routledge Handbook of Conspiracy Theories (2020)による陰謀論の定義は以下のようである⁴⁾。

- ① 陰謀論は時事問題や歴史の大筋を理解するための方法であり、意図主義、二元論、オカルティズムを特徴としている。陰謀論は、すべてが計画されており、偶然に起こることはないとし、世界を悪の陰謀者とその陰謀の無実の犠牲者に厳密に分け、陰謀は秘密裏に行われ、目的を達成した後もその存在を明らかにしないと主張する。

もう一つ、より一般的な定義もある。

- ② 「偶然に起こることは何もない、見かけ通りのことは何もない、そしてすべてが繋がっている」という考え方である。

陰謀論は人が世界で起こりつつあることを理解する方法そのものに関わっており、どこまでが正常な推理でどこからが陰謀論的思考かを線引きすることはできない。そして陰謀論は社会病理であって精神病理ではないというのが一つの考え方だが、はたしてそのように割り切れるだろうか？

3. 陰謀論の無謬性と反証不能性

陰謀論は以下のような性質を持っているため、絶対に正しく、すなわち無謬性を持ち、かつ誤っていると証明されることは絶対にない、すなわち反証不能性を持っている²⁾。

- 世界のすべては相互に関係し統一された陰謀のタペストリーを織り成しているのだから、あらゆるものから陰謀の「証拠」を読み取ることができると考えられる。
- 陰謀を証明する証拠は真実であり、陰謀を否定する証拠は虚偽であるとされる。
- 陰謀論的信念に対する否定的証拠が出てくるたびに、それを合理化するために陰謀の新たな層を追加して複雑化していく。
- 陰謀を証明する証拠がないことは、それだけ陰謀勢力が強大で周到であることを示しているので、それ自体が陰謀の証拠であるとされる。
- 陰謀論の論理は内部で完結しており、外部から見れば荒唐無稽で矛盾に満ちていても、それ自体としては整合性を保つことができる。
- 「真実は隠されている」のだから、否定されて当然なのであり、むしろ否定されてこそ陰謀論は成立する。

陰謀論の特性としての無謬性・反証不能性は、迫害妄想や誇大妄想といった精神病性妄想の特性としての「訂正不能性」と酷似している。妄想の訂正不能性とは、その妄想的信念が間違っていて事実ではないという証拠をいくら示されても、信念を訂正することができないという性質である。陰謀論的信念も妄想的信念と同じように、感情的に確信されているため、論理的説得によってその信念を覆すことが極めて難しい。

また、世の中で起こっていることの多くは一つの主体の意思によって意図的に起こされているという「意図主義」の世界解釈も、精神病性の迫害妄想と共通している。すなわち、迫害妄想においては、あらゆる時間と場所において自分を監視し、苦しめるような組織が存在していると考えられる。陰謀論においては思い通りに世界を動かしている巨大陰謀組織としての「ディープステート」や「フリーメイソン」が想定されていることが多いが、それは迫害妄想を持つ精神病患者が、不可思議な迫害をし続ける「謎の組織」を想定することとよく似ているのである。

このように、陰謀論と精神病性妄想とは確かに共通点が多い。しかしながら、陰謀論を信じることは、外部にすでに存在する特定の世界解釈を取り込むことであり、妄想が病的な個人の精神の中で自然発生することとは違うと考えられる。とはいえ、ある人が特定の陰謀論に触れて、それに強く捉えられ、信じ込んでしまう過程には、患者個人の精神の中で妄想が発生する過程と共通する部分があるのではないだろうか。

4. 陰謀論信者と宗教的信仰者の比較

陰謀論を信じる人たちは、その陰謀論を知ったことによって世界観が激変し、世界の真実が分かったと感じる体験を「覚醒」と呼んでいる。これは「真実を知って賢くなった感じ」や「自分たちだけが真実を知っているという選民意識」と解釈することもできるが、実際は妄想を発症した精神病患者が持つとされる「一段高次の現実」の感覚と同じものなのではないだろうか。「一

段高次の現実」とは、客観的には外部の現実が妄想世界に取って代わられた状態なのだが、本人にとっては「現実よりさらに現実的なものに触れた」という強い高揚感を伴う状態なのだと考えられる。

「覚醒」は宗教的な修行によって得られる「すべてが分かった」という悟りの体験とも似ているが、悟りが多くの場合に肯定的な世界観をもたらすのに対して、陰謀論への「覚醒」は否定的な世界観をもたらし、世界が変革されなければならないという認識を形成する点が大きく異なる。とはいえ、何らかのきっかけによって陰謀論に触れ、それを信じることによって世界観が激変し、日常生活までが変わってしまうということは、やはり宗教を信仰し始めることと酷似している。そして宗教的信仰も、その内容はそれを共有していない人からは妄想と同じように不合理に感じられる。

しかしながら、宗教的信仰は、少なくともその宗教団体の内部で共有されているということによって精神病性妄想の定義から外れる。すなわち、社会的に共有されている信念・信仰は妄想から除外される。それに対して、陰謀論信者は周囲から孤立しているように見えるが、実際にはインターネットなどによって繋がった仲間がおり、仲間の間での密なコミュニケーションによってその陰謀論への信念を強め合っている。つまり、陰謀論の訂正不能性は、実際には宗教と同じように、仲間の支持による部分が大きいのである。ということは、陰謀論を信じることは宗教的信仰と同じ理由で妄想ではないと考えるべきなのだろうか？

実際、宗教的世界観と結びついた陰謀論も多くあり、またカルト的な新興宗教が陰謀論を信仰の内容としていることも少なくないので、宗教的信仰と陰謀論を分離することは難しい。しかし、少なくとも伝統的な宗教の信仰者と陰謀論信者の印象はかなり異なる。その理由の一つは、一般的な宗教的信仰者がコミュニケーションにおいて感情に焦点を当てる傾向が強いのにに対して、陰謀論信者は極端に知的・論理的であることである。そしてもう一つは、宗教的信仰者が基本的に個人の精神的救済を目的としているのに対して、陰謀論信者はできるだけ多くの人に巨大な陰謀を認識させることによって現実世界を変革することを目的にしていることである。だからこそより精力的に、性急に活動する傾向がある。

つまり、陰謀論を信じることと宗教的信仰は形式的には似ていても、それらを実行する人の性格や価値観が異なるのである。

5. 陰謀論の心理学

それでは、陰謀論を信じやすいのはどういう人なのだろうか？ 近年、陰謀論に捉えられやすい個人の心理学的特徴についての研究が盛んに行われ、以下のような知見が得られている³⁾。

認知的特性としては、

- 批判的・分析的思考能力の低さ
- 意図性バイアス、すなわち結果には必ず原因となる意図があると考ええるバイアス

- 認知的閉鎖欲求、すなわち不確実性に対する不寛容
- 動機付けられた推論、すなわち自分の世界観に反する情報は受け入れない傾向

など。

また性格的特性としては、

- 不安型の愛着スタイル
- 独自性欲求・ナルシシズム
- 二元論的思考・教条主義
- 魔術的思考・超常的発想

などである。

また、陰謀論を信じる人の心理学的特徴として「パラノイア傾向」つまり被害妄想の傾向がよく指摘される³⁾。しかし、精神病症状としての被害妄想（迫害妄想）が何者かによる本人個人への執拗な迫害を訴えるのに対して、陰謀論は悪意を持った集団による本人を含む集団もしくは国民ないし人類の全体に対する危害を訴える。すなわち、陰謀論信者は集団帰属性ないし仲間意識を基本としており、自分の属する集団と権力を持つ悪意の集団との対立を問題としている。この意味で、陰謀論を信じることは基本的に社会的な行為なのである。

さらに言えば、陰謀は基本的に政治的な事象なのだから、陰謀論もまた基本的に政治的な事象なのである^{3,5,6)}。その意味は、陰謀論は党派性に強く関係しており、人は自らの属する党派が権力を持っていない時、すなわち自らが敗者の立場にある時に、権力を持つ側の党派に対する攻撃の一つの形として陰謀論を抱くのだということである。この説も陰謀論が社会的次元の現象であって、個人の精神病理ではないという見解を支持する。

一方、精神病患者の抱く妄想のうちでも少なくないのが「復権妄想」、すなわち自らの財産や権利が不当に奪われているというものであり、これは社会的動物としての人間の社会的地位ないし生存権に関わるテーマの妄想である。復権妄想は党派性とは無関係だが、個人の精神病理さえも社会的闘争を基盤にしていることを示すものであり、陰謀論と無関係とは言えないだろう。

6. 陰謀論とインターネット

ところで、コロナワクチン陰謀論を信じ、ワクチン接種を拒否した人たちは現在どうしているのだろうか？ その片鱗が窺える以下のような SNS への投稿があった（x への投稿より、2024 年 9 月確認）。

（投稿者 A）地下鉄で座っていた自分の前に上品で清潔な感じの中年女性が立った。すると腐敗したような異様な匂いがしてきて、息苦しくなった。いやだなあ…。

（投稿者 B）それは例の匂いですね。

（投稿者 A）そうです。コロナワクチン接種者からのスパイク蛋白のシェディング〔注：身

体から周囲に撒き散らされること] だと思います。私はこれを感知することができるからまだ逃げられるけれど、感知できない未接種者がこれを浴びると危ない。最近、街をフラフラ歩いている人が多いけれど、あれはそういう被害者だと思います。

(投稿者C) 私も感じます。いよいよ終末が近づいていますね…。

この会話の内容は尋常ではないと思われるが、このような人たちの精神状態をどう理解すべきなのだろうか？ コロナワクチン陰謀論が多くの人に妄想状態を引き起こしたのだろうか、それとも、もともと妄想的だった人たちがコロナワクチン陰謀論を取り込んだのだろうか？

このような陰謀論の流布には、近年における情報環境の変化、すなわち大多数の国民がインターネットを介して情報を摂取するようになったことが一役買っているのは確かだろう^{1,5,6)}。

具体的に言えば、自分と同じ意見の人としか繋がらず、自分と同じ意見ばかり読むことになる「エコーチェンバー現象」や、連想アルゴリズムによって自分の興味のある情報以外には触れられなくなる「フィルターバブル現象」が特定の考えに対する確信を強める作用をもつことは明らかである。

さらに、コロナ禍の自粛状況においては、人々がネット情報に没入する時間が長くなり、それだけより陰謀論に曝露され、取り込まれる機会が増加していたものと考えられる。

7. 陰謀論と妄想の発生過程

迫害妄想や誇大妄想などの精神病性妄想の発生過程については、三段階に分けて考えることができる。すなわち：

- ①身の回りで起きていることの意味が理解できなくなり、困惑する。
- ②多くの理解できない物事に対して統一的な説明を与えるような解釈、すなわち世界解釈を探し求める。
- ③常識を逸脱した解釈としての妄想が発生し、それが積み重ねられて妄想体系が構築される。

ここで、①は脳内の病的過程の進行による認知機能障害だと想定され、②は①に対する心理的反応としての行動だが、その反応の強さは本人の素質によって大きく左右されるものと考えられる。すなわち、精神病性妄想は脳内の病的過程と心理的素質の組み合わせによって発生するものなのである。

一方、コロナ禍においては、まるで人体実験のように、①の条件が社会の側から与えられた。特にわが国の場合は身の回りでバタバタと人が死んでゆくような事態ではなかったので、何のために外食産業を強制的に営業停止としたり、学校を休校にしたり、大規模なイベントを開催中止にしたりしているのか、実感的には分かりにくかった。理由が分からないまま、いきなりパートの仕事がなくなり、生活が成り立たなくなって困窮した人も少なからずいたのであり、そういう

人たちにとってはまったく不条理な状況だったはずである。それでも大多数の人は①に対する反応としての②を実行せず、進んで、またはしぶしぶ政府の方針に従って行動したのだが、一部の妄想的・猜疑的素質を持った人たちが②を実行する過程で、インターネット上の陰謀論を取り込んでいった。その結果、政府の方針を受け入れなくなり、外見上は③の妄想患者とそっくりな陰謀論信者になってしまったと考えることができる。

インターネット時代に入ってから、統合失調症患者が自らの精神症状（自我障害症状）を説明するために「集団ストーカー」という妄想的概念を用いることが多くなっている⁷⁾が、この「集団ストーカー」はちょうど妄想と陰謀論を繋ぐ位置にある。

自分たちを常に追跡・監視し、嫌がらせをしてくる「集団ストーカー」の正体はカルト宗教、政府関係者、マスメディアなどであり、その目的はターゲット（＝自分たち）を精神疾患に仕立て上げて社会的に抹殺することだと言われている。したがって、これを信じる人は精神科への受診を勧められても断固として拒否し、治療されないため、「集団ストーカー」という妄想から解放されることがない。

これは同じような異常体験を持つ患者たちがそれを説明する妄想的理論を社会的に共有したもので、患者同士のエコーチェンバー現象の産物だと考えられる。この「集団ストーカー」は個人的な妄想から社会的な陰謀論が生成するメカニズムを示唆している。コロナワクチン陰謀論における「シェディング」という概念にも同様のメカニズムが関与しているのではないだろうか。

すなわち、幻臭などの個人的な幻覚体験に対する解釈として、社会の一部で共有されているコロナワクチン陰謀論が取り込まれる。しかも同じような幻覚体験を持っている人たちが同じ陰謀論を取り込んでゆくことによって、その陰謀論についての集団的支持が強まっていく。そして結果として、科学的根拠のない「シェディング」のような現象についても実在すると信じられ、むしろ世間で認められていないことが不当なことだと考えられるようになっていくのである。

このようにして、個人的な迫害妄想から社会的な陰謀論が生成することが理解できる。同種の病的体験を持つ人たちが同種の世界観を受け入れるのは、ある意味では自然なことであり、このことは精神疾患による社会の分断の可能性をも示しているように思われる。

8. まとめ

コロナ禍において顕在化した陰謀論の流布について、精神病理学的に分析することを試みた。

陰謀論には精神病性妄想との共通点としての無謬性・反証不能性があること、陰謀論を取り込んで「覚醒」した人は活発な妄想を持つ精神病患者と行動面が似ていることなどから、陰謀論は社会病理であって個人の精神病理とは関係がないと割り切ることはできない。

コロナ禍における陰謀論の流布には、国家的感染対策施行下の不条理な社会的抑圧状況が、妄想的素質を持った人たちが陰謀論に触れ、それを取り込みやすい条件をもたらしたことが寄与していたと考えられる。

「集団ストーカー」は精神病患者同士によるエコーチェンバー現象によって個人的な妄想から社会的な陰謀論が生成するメカニズムを示唆しており、コロナワクチン陰謀論にも同様のメカニズムが寄与している可能性がある。

最後に、陰謀論の流布は精神疾患による世界観の分断の可能性を示唆していることを指摘した。

参考文献

- 1) 読売新聞大阪本社社会部：情報パンデミック — あなたを惑わすものの正体。中央公論新社，東京，2022年。
- 2) 辻隆太郎：陰謀論へのイントロダクション。現代思想 49(6)：42-58，2021。
- 3) ジョゼフ・E・ユージンスキ（著）、北村京子（訳）：陰謀論入門 — 誰が、なぜ信じるのか？ 作品社，東京，2022年。（原書：Uscinski JE: Conspiracy Theories: A Primer. Rowman & Littlefield Publishing, Lanham, 2020.）
- 4) Butter M, Knight P (Eds.): Routledge Handbook of Conspiracy Theories. Routledge, Abington, 2020.
- 5) 笹原和俊：フェイクニュース科学する — 拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ。化学同人，東京，2018年 / 2021年。
- 6) 長迫智子，小谷賢，大澤淳：SNS時代の戦略兵器 陰謀論：民主主義をむしばむ認知戦の脅威。ウェッジ，東京，2024年。
- 7) 古牧和都：集団ストーカー — 盗聴発見業者が見た真実。晋遊舎，東京，2007年。